

鬼と仏と

住友を破壊した男・伊庭貞剛

江上 剛

第七回

第七章 煙害問題発生

1

明治二十三年（一八九〇年）七月一日から三日間、第一回衆議院議員選挙が実施され、貞剛ていこうは郷里の人たちに乞われて滋賀県第三区から出馬し、当選した。

明治という新しい時代になったものの、政府の実態は伊藤博文いとうひろぶみら長州閥などの専横が目立っていた。

そこで人々の間に、イギリスなど欧州にならって国会を開設し、広く衆議を尽くすべきであるとの声が強くなり、国会開設運動や自

由民権運動が盛んになった。

政府自体も新政府を立ち上げる際に五箇条の御誓文せいもんを発し、「広く会議を興し、万機公論に決すべし」と言っている以上、国会開設を約束せざるを得ない状況に追い込まれていた。

政府内でも議院内閣制とし、早期に国会を開設すべしと主張する大隈重信おおくましのぶと、君主制とし、国会開設は時期尚早とする伊藤博文とが対立し、大隈重信が下野げやする明治十四年（一八八一年）の政変が起きるなど、国会開設を巡って対立が激しくなっていた。

そこで明治十四年、国会開設の詔みことのりが発せられ、明治二十三年を期して憲法制定と国会開設が約束されたのである。

貞剛は明治十二年（一八七九年）に住友に入社して以来、大阪紡績や大阪商船の設立、かつ経営再建や大阪市立大学開設など、叔父の幸平さいへいに代わって財界活動を精力的にこなしていたが、今一つ、充実感がなかった。

国事に奔走ほんそうした青春時代、法治国家を目指して戦った司法官時代は、絶えず崖がけつぶちに追い詰められ、一歩間違ったり、後退あじすさりすると、命さえ危うくなる、ひりひりとした緊張感があった。

それに比べると、住友という関西では比肩ひけんするものなき強力な組織の大幹部として、かつ幸平という強力な権力者の下で働くことに関して、本当に自分の生きる道なのだろうかという迷いを覚えるこ

とがあつた。

ある時、貞剛は自分の悩みを臨済宗天龍寺の峩山和尚りんざいしゅうてんりゅうじ がざんおしょうに率直に打ち明けた。

峩山は、京都天龍寺の禅僧で、禁門の変で焼かれてしまった天龍寺の伽藍がらんなどの再建に尽力していた。その際、住友にも支援を求め、頻繁に貞剛を訪ね、鰻谷の邸宅に寝泊まりしたため、いつしか貞剛と肝胆相照かんたんらす仲となっていたのである。

貞剛は、青年の頃、西川吉輔よしすけを父のように慕い、大きな影響を受けた。吉輔亡き後は、峩山が精神的支えとなっていた。

峩山は嘉永六年かえい（一八五三年）生まれであり、貞剛より六歳も年下であるが、その言動は師、ないし兄ともいうべきものだった。

このように峩山と親しい関係になったことに対し、貞剛は妻・梅子に感謝していた。

梅子は、峩山が引き連れて来る天龍寺の雲水うんすいたちを心からもてなし、屋敷で寛ぐくつろのを許した。

「梅子殿に会いに来るのが、楽しみでございます」
峩山は快活に笑うことがあつた。

貞剛が留守にしている時も、峩山たちは屋敷に上がり込み、時には貞剛の方が居候いせうこうのように窮屈な思いをすることさえあつたのである。

「東嶺禪師をご存知か」

貞剛の悩みに対して峩山は、十八世紀に活躍した臨濟禪の高僧白隠禪師の高弟、東嶺禪師の名前を挙げた。

東嶺禪師は「白隠あつての東嶺か、東嶺あつての白隠か」と称せられた高僧だが、近江国出身で、貞剛と同じく近江源氏佐々木氏の流れを汲むという。

「東嶺禪師の『宗門無尽燈論』に『君子財を愛す、これを取るに道あり』という言葉があります。事業で財を築く、すなわち事業で金儲けをするのにあたって正しい道を歩めば、決して問題はないという意味に解釈できるでしょう」

「石田梅岩が『都鄙問答』で、商人が正しい方法で利益を得るのは武士が俸禄を得るのと同じだ、決して恥ずかしいことではないというのと同じですね」

「住友で利益を上げることは国に尽くすことと同じだと解釈できません。また『財』を、金銭的な財ばかりではなく社会に貢献すること含まれると考えれば、どのような道であろうとも正しいと信じる道ならよろしいということでしょうな」

峩山の言葉に貞剛は救われた気がした。

自分が正しいと信じた道を歩めば、それが住友、ひいては国家に尽くすことになるのだ。

峩山の教えが背中を押した。貞剛は、住友の地元、大阪の企業人
たちや郷里の滋賀県の人々から第一回衆議院議員選挙に出馬するよ
うに懇請されていた。

国に尽くしたいという熱意を持ち続けている貞剛は、これこそ君
子が愛する「財」だと思った。

出馬には宰平も賛成した。

住友には「政治に関与するなかれ」という不文律がある。しかし
それは度を越してはいけないという、商家には普通にある考えでも
ある。

実際、宰平はこれまで政治に翻弄ほんろうされ、住友を守るために政治に
深く関係してきた。

維新直後に新政府が別子銅山べっしを接收しようとした際、土佐の川田
小一郎こいちろう、後藤象二郎ごとうしょうじろう、公家の岩倉具視いわくらともみら新政府の要人と交渉し、
別子銅山を守った経験がある。

宰平の立場から言えば、最も信頼する貞剛が衆議院議員となって
政治的な交渉を担ってくれば、住友の経営にとって非常にプラス
になると考えたのだ。

貞剛は、結局、郷里の滋賀県からの出馬を決意し、当選したので
ある。

「当選、おめでとう。国会で会うのを楽しみにしている」

品川弥二郎は言った。貞剛は、尊攘堂の庭で品川と会っていた。

尊攘堂は、品川が京都高倉通錦小路の旧典薬頭の別邸を買取り、幕末の志士たちを祀ったものである。

品川の師である吉田松陰は、京都に若者たちの教育機関として尊攘堂を作る希望を抱いていた。しかしその夢を果たすことなく、安政の大獄に倒れてしまった。

その遺志を継いだのが品川というわけだ。

「議員として国に尽くすことができる喜びを感じています」

貞剛は、落ち着いた風趣の庭を眺めながら言った。

「しかし政治の世界は理想通りとはいかぬから。伊庭さんに向いているかどうかはわからないな」

品川は、茶を啜りながら静かに言う。

「萩山和尚からも同じことを言われました」

貞剛は薄く笑った。

萩山は、衆議院議員当選を祝うどころか貞剛に、「ご迷惑なことです。なるべく早めにおやめなさい。あなたには向かないよ」という手紙を寄越していたのである。

「和尚らしいな。理想通りとはいかないことが多い。とりわけ政治の世界はね」

品川が属する長州閥は、明治政府で最も勢力を持ち、伊藤博文、

井上馨、山県有朋らが政治を牛耳っていたが、品川は彼らから距離を置き、産業、特に農業振興に注力していた。

「汚職が蔓延しているからですか」

貞剛の問いかけに、品川は哀しそうな視線で応えた。

長州閥の山県や井上の汚職は目に余るものがあり、世間を騒がすことも度々だった。

「だから私は松陰先生の理想を後世に伝えるために、この尊攘堂を作った。私は十五歳、松陰先生は二十七歳、伊藤も井上も皆、若かった。塾といっても八畳、六畳、そして土間があるだけの藁ぶきの粗末な建物だね。そこに三百人も生徒が押し寄せた」

品川は往時を懐かしんだ。

「大変な数ですね」

貞剛も茶を啜った。

「だから私たちが四畳半の小屋を建て増したんだよ。私は左官になってね、壁を塗った。先生は私に向かって壁土を投げた。私が屋根の上に登って、その土を受けたのだが、ははは」

品川は突然、笑いだした。

「どうされましたか」

「なんとも間抜けな話だが、その土を受け損なってるね。ああ、と悲鳴を上げたが、その土が先生の顔にべったりと……」

品川は少年時代に戻ったかのように愉快そうに笑いながら、両手で顔を隠した。松陰の顔に張り付いた壁土を手で表現したのだ。

「それは大変でしたね」

貞剛も笑った。

「しかし、時代は変わった。皆、先生の教えを忘れてしまい、私欲に駆られているかのようだ。だからせめて私くらいは先生のお考えを継ぎたいと思っている。政治の世界は、伊庭さんのような真つすぐな人には汚れている面があるが、だからこそ伊庭さんのような人が貴重だと思う」

貞剛は、品川の言葉を真剣に受け止めた。

品川も鞍山も、貞剛は政治家には向かないと言うが、それでも貞剛は国に尽くすことができるのを密かに喜ぶ自分がいるのに気づいていた。

貞剛は第一回帝国議会の出席のために、東海道本線の列車の客となり、東京に向かった。

東海道本線は明治二十二年（一八八九年）七月に、神戸―新橋間約六〇〇キロが開通していた。

後に鉄道の父と尊称される井上勝（よしかた）たちが、第一回帝国議会開会に向けて努力した成果だった。

第一回衆議院議員選挙の有権者は、満二十五歳以上の男性で十五

円以上の国税を納付している者。約四十五万人、総人口三九三八万人の一・二四%だった。

また被選挙権者は満三十歳以上の、やはり国税十五円以上納付する男性で、議員定数は三百人だった。貞剛は、その一人となったのである。

2

「あなたが住友の伊庭さんかね」

伊庭が議場の正面議長席に向かって左側の九九番席についていると、がっしりとした体躯のいかにも意志が強そうな印象の男が声をかけてきた。

第一回帝国議会は午前十時に始まる。そろそろ開会時間になる。出席議員たちはそれぞれ自分の席につき始めていた。

「はい、伊庭ですが」

貞剛は椅子から立ち上がった。

「私は」男は、後ろを指さし、「最後尾の二七七番の席の田中正造しんせうと申します。栃木三区で立憲改進黨から出ております。下野の百姓しんげであります」と自己紹介した。

田中は大隈重信が率いる立憲改進黨に属していた。

一方、伊庭は院内会派である大成会に属していた。立憲自由党や立憲改進黨などの自由民権運動を進めてきた政党とは一線を画する立場だった。

「別子銅山は開坑二百年を祝われたようですが、銅山など、早々におやめなさい」

突然に野太い声で言う。

明治二十三年五月から六月にかけて住友大阪本店、新居浜、別子銅山など各地で銅山開坑二百年を祝う祝典が、前家長友親（しんちか）に代わって十九歳の若き十三代家長友忠（ともたけ）を迎えて盛大に開催されたのである。

「何を失礼なことをおっしゃるのですか。このような場所で」

貞剛は、挨拶も早々になんとという無礼な振る舞いだ（ふんがい）と憤慨した。

眉根を寄せ、ぐいっと睨んだ。

「失礼を承知で申し上げます。あなたが別子銅山の経営者であることを知った上でのことです。私は古河市兵衛（ふるかわいちべえ）が経営する足尾銅山（あしお）が地元であります。ここでは銅の増産を進めるあまり、鉱毒被害が出ており、渡良瀬川流域の住民を苦しめております。あなたがた銅山経営者は、銅は国家なりと、増産に次ぐ増産を為し、巨万の富を築いております。しかしその結果、この豊かな国土を鉱毒で汚し、農民を苦しめているのです。真の文明というものは、山

を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべしと考えます。銅より国土、銅より農、銅より人、であります。私は、足尾銅山の鉱毒問題を国家の責任において解決するために議員になりました」

正造は、一気に言い切ると、急に笑みを浮かべた。

その表情の変化に貞剛は戸惑ったが、正造の笑顔には人を引き付ける魅力があった。

太い眉に人を射るような大きな目と厚い唇。全体的に武骨な顔立ち、峯山に似ている。

そう思うと、不躑な態度の正造に親しみを覚えた。

「田中正造先生のお言葉、よく肝きもに銘じておきます」

貞剛は軽く低頭した。

「失礼ながら、あなたのことを調べさせていただきましたが、もともとは司法官であったとのこと。司法官とは正義を為す仕事であります。そうであればただ金儲けに明け暮れる資本家ではないと見込んで、失礼を承知で申し上げます。足尾銅山では銅の生産量が増加するにつれ、煙害で山々の木々は枯れ果て、川の魚は死に絶えました。さらに今年の八月二十三日に大雨が降り、渡良瀬川が氾濫はんらんいたしました。その結果、鉱毒を処理するために作られた沈殿槽ちんでんそうが決壊し、流域の村々に鉱毒水が溢れたのです。農民たちは、洪水が去っ

た後も、鉋毒に覆おおわれた土地では作物も作れず、たとえ作ったとしてもそれを食した途端に体が病に侵されてしまうという始末。誠に悲惨であり、早急に解決しなければ、更に大きな問題になります。ぜひとも私のこれからの活動に注意を払っていただき、これ以上、日本各地の農地、山林を破壊せぬようお願いしたい」

貞剛は、別子銅山の景色を思い浮かべていた。

それは木々が枯れ、赤茶けた土がむき出しになっている山の姿だった。

あの山々を初めて目にした際、貞剛の胸を表現がたし難い痛みが走った。それは一言で言えば悲しみであり、山々から発せられる悲鳴が胸を貫いた痛みだった。

あまりにも自分が育った近江の琵琶湖周辺びわこの緑溢れる景色と違いくすぎることに、強い衝撃を受けたのである。

「私も別子銅山の木々が枯れているのに心を痛めております」

「金儲け主義おちいに陥おちいって、この国の自然や農民を苦しめてはなりませんぞ」

正造は目を大きく見開いた。

「私は金儲けが得意ではありません」

貞剛は笑みを浮かべた。

その時、開会を告げるベルが鳴った。

「田中先生、そろそろ議会が始まります。本日、いただいたご意見は肝に銘じさせていただきます」

貞剛は微笑んだ。

「あなたは普通の経営者とは違うようだ。非常に正直な方で人の痛みが分かるようだ。ぜひ私にもお力を貸してください」

正造は、貞剛に握手を求めてきた。貞剛は、その手を握った。節くれだつてごつごつとした感触の、まさしく土とともに生きた手だった。下野の百姓というに相応ふさわしい手だ。

午前十時になった。曾禰そね荒助書記官長が議員全員が着席したのを確認して「諸君に申し上げます。議員法第三条第二項によりまして本職が議長の職務を行います」と宣言し、仮議長として議長、副議長の選出を進めた。

貞剛は緊張しつつ、議員としての職務に臨んだ。

3

明治二十三年、別子銅山開坑二百年の式典を盛大に祝っていた住友家は、突然、大きな災難に遭遇することになる。

第十三代家長、友忠は、別子開坑二百年の式典を別子や大阪で行った後、同年十月三十一日に東京神田の住友別邸に戻る途中の汽車

の中で発熱に苦しんだ。

急遽、日本橋区数寄屋町の旅館島屋で病床に臥すことになった。

病名は腸チフスだった。

貞剛は、同年十一月二十五日に開会される第一回帝国議会に出席するために上京しており、すぐさま友忠を見舞った。

災難は続く。友忠が病床に臥している間の十一月二十三日に、かねてより病氣療養中だった友忠の父、友親が亡くなったのである。

享年四十八。

一方の友忠の病状も一向に回復に向かわないまま、十一月三十日午後十一時十分、旅館島屋に於いて亡くなる。享年十九。

貞剛は、特に友忠の死に衝撃を受けた。というのは、友忠の教育係を担っていたからである。

貞剛は友忠を家長たるべき人物に育てるため、自らの出身地の滋賀県にある、質実剛健な校風で有名な彦根中学に入学させた。

友親を含む何代かの家長は、住友家の事業運営に身を入れず、趣味に淫する人物が続いていた。

幸平は、家長は「シャツポ」、すなわち「飾り」で良いという考えを持っていたが、貞剛はそうではなかった。

家長は、国家における天皇と同じ存在であり、住友家で働く社員の精神的な支柱であるべきだと考えていた。

何か問題が発生したり、社員だけでは解決が不可能な問題が発生した時には、オーナーとして果敢な決断を下すだけの度量を備えて欲しいというのが貞剛の友忠に対する期待だった。

貞剛は、友忠を彦根中から明治二十二年に学習院高等科に入学させ、東京神田の住友家別邸から通学させていた。

友忠の家長教育は順調に進むかと思われていたのに、友親、友忠の死という思いがけない事態に、貞剛は天を仰いだ。

宰平でさえ「実に住友家にとり最も第一事の災害」と言い、事態の收拾を急ぐことになる。

宰平は、貞剛に衆議院議員を辞め、住友に戻るように命じる。

貞剛は、迷いはしたが、議員を辞職することにした。住友の一大事に中途半端な対応はできないと考えたからである。また友忠の教育係として、その健康管理にまで気を配らなかったことへの大いなる後悔の思いもあった。

品川弥二郎は、「もったいない」と止めた。

品川は、すでに政界で重きをなしており、いつ大臣に任命されてもおかしくない立場だった。

しかし大臣になるよりも農業などに強い関心を持っており、日本の農業の発展に政治生命を懸けようとしていた。そのため良き同志として貞剛に期待していたのである。

貞剛は、「広瀬幸平が困っているので助けねばなりません」と品川に言い、翌明治二十四年（一八九一年）七月七日に議員を辞職した。

辞職にあたって貞剛は田中正造に挨拶をした。住友が存亡の危機にあり、それを切り抜けなければならないと告げたのである。

正造とは、国会で最初に親しく言葉を交わしたというだけではなく、「真の文明というものは、山を荒らさず、川を荒らさず、村を破らず、人を殺さざるべし」という言葉に心を動かされていた。

「それは惜しいことです。しかし国会議員は多人数ですが、住友を支えるのはあなた一人であり、余人をもって代えられません。あなたが住友を破壊するほど変革し、刷新されることを期待しています」正造はごつごつと節くれだった手で貞剛に握手を求め、「私は足尾の鉱毒問題を国会で追及いたします。私はこの問題に命を懸ける所存です。ぜひ見守っていただきたい」と強い口調で言った。

貞剛が大阪に戻ると、幸平はすでに友忠の母、登久とくに十四代家長を継いでもらい、十七歳の長女、満壽ますに婿むこを取って第十五代家長にする方針を決めていた。

「お前に満壽様の結婚相手を探してもらいたい。経営は私が行うから、心配するな。家長なんぞは『シャッポ』に過ぎん」

幸平は、貞剛に命じた。

貞剛が懸念していることがある。それは幸平がこのところ傲慢ごうまん

になつてきたことだった。

宰平のことを貞剛は、「元げん龜天正きてんしやう以来の英雄」と尊敬していた。

その勇氣、決断力、リーダーシップは織田信長や豊臣秀吉に通ずるものがあると感じていた。

そのお陰で住友は幕末、明治の経営危機を乗り切り、別子銅山開坑二百年を盛大に祝うことができたのだ。

「しかし……」と貞剛はつぶや呟く。

二百年の祝いの年にこれだけの災難が降りかかるのは、何かを変えなければ、一大事になるという天の啓示ではないのか。

貞剛は、元司法官であり、色々な情報には他の人より耳ざとい。

巷間こうかんの噂、雑多な情報から犯罪の証拠を見つけ出すのが仕事だったからだ。そのためか社内の噂などには、どうしても敏感になる。

かつては新政府に反抗的な人物を探索した経験もある。

「友親様を死に追いやったのは宰平殿だ。若き友忠様を祝いの席に連れまわし、これまた死に追いやった。これも宰平殿の責任だ」

「体が悪い友親様を酒席に誘い続けて、わざと病を悪化させた」

社内には、宰平を批判する噂が流れるようになった。

このような噂を、甥おいである貞剛は聞きたくはなかった。

しかし友親が、経営の権限を宰平に移譲するという名目で全て奪われて以来、生きる意欲をなくしたかのように貞剛にも見えていた

ことは事実だ。

友親すいはんに随伴し、別子銅山に行ったことがあるが、友親は、酒や趣味たんできに耽溺するだけの無能な人物ではなかった。

宰平の悪評は、厳しい人事制度の採用にも原因があるのではないだろうか。

宰平は「子抱こがかえ」という子飼いの社員を優遇する制度を廃止し、「中年ねん」と呼ばれる中途採用の者でも差別なく昇進させ、また「仲間ちゆうげん」と呼ばれる現地採用の者に対する昇進差別も無くした。

宰平は「今日文明開化の域に至り、無能頑愚むのうがんぐの者、上等に座し、その権を振るう謂れいわこれなき事」と言い放ち、単なる年功序列で偉くなった無能な管理職を排する荒療治に出たのだ。

この実力主義人事は近代的な経営のためには必要な措置だったが、古参の社員には恨みに思う者もいたのである。

実力主義と言いながら、一方では貞剛のような自分の縁故者を優遇しているのではないか、という声も耳にした。

貞剛は、宰平の甥であることを笠に着た振る舞いをしないようにしているつもりだが、それでも全く批判がないわけではなかった。

人間誰しも成功すれば、傲慢になっていくものだ。孔子こうしは、君子に三戒ありとして、若い時は情欲、壮年期は争鬪欲、そして老年になれば物欲と、それぞれの年齢に応じて自戒しなければいけないと

説いた。

幸平も六十四歳で、老年の域に入った。物欲というよりもいよいよ権勢を振りたい欲が大きく膨らんだのだろうか。

今、住友社内には、「逆命利君、これを忠と言う」と直言する人材はいなくなり、誰もが陰でこそこそと幸平に対する不満、批判を口にしていく。

ところが表向きには我が身可愛さで口をつぐんでいく。

このままでは「従命病君、これをへつらいとなす」人材ばかりになってしまう。

政治の世界も、官僚の世界も、君主は誰かということ忘れてしまっているから、本当の忠義すたが廃れてしまうのだ。

日本の君主は天皇である。ところが今は薩摩や長州の権力者たちがまるで君主であるかのように振る舞う。だから品川が嘆くように汚職が蔓延しているのだ。

住友も同じだ。本当の君主は家長である。幸平ではない。幸平は、ただの雇われ人に過ぎない。そのことを十分に自覚しなければ、住友にとっても幸平にとっても大きな災いになる。

住友の危機は、友親、友忠の死ではない。幸平の独断専行だ。

貞剛は、新しい家長には、幸平がどれほど権勢を振るおうとも、いざとなれば絶対に勝てないほどの権威と人間性、能力などを兼ね

備えた人物を選ばねばならないと固く誓った。

「いざとなれば私が宰平叔父と刺し違える覚悟を持って、逆命利君にならざるを得ないだろう」

貞剛は、宰平が望むような単なる「シヤツポ」ではなく、この未曾有の災いを転じて福にしてくれるような人物を探し出すことに決めたのである。

貞剛の下には自薦、他薦の婿候補の情報が上がってきた。政治家や商家からの候補は丁寧^{せいずい}に断った。政治家と姻戚関係^{いんせき}になった場合、その政治家に住友の盛衰が影響^{せいずい}されてしまう。商家と姻戚関係になった場合、その商家に家業が影響を受けてしまう。

貞剛は、あらゆる情報網を駆使して婿候補を探した。まさかこんな時に、元司法官としての情報網や情報収集能力が生きたとは思わなかったと皮肉な思いに囚われることもあった。

情報収集に奔走^{ほんそう}していた貞剛の下に有力な情報をもたらされた。

徳大寺公純^{とくだいじきんいと}の第六子、隆麿^{たかまろ}である。

公純は明治十六年（一八八三年）に六十三歳で没したが、幕末から明治初年にかけて攘夷派^{じやうい}公家として活躍し、右大臣にまでなった人物だ。

幕末において公家は百三十数家あったが、そのうち藤原氏系が百家あまり。そしてその中でも近衛^{このえ}、鷹司^{たかつかき}、一條、二條、九條の五摂

家は摂政関白にまで、久我、三條、西園寺、徳大寺、花山院、大炊御門、菊亭、廣幡、醍醐の九家は右大臣、左大臣にまで昇ることができる決められていた。

徳大寺家は公家の名家、九家の一つである。

また、公純の長男、實則は明治天皇に仕える侍従長、内大臣、公爵。次男西園寺公望は伊藤博文に従って憲法制定に尽力し、ドイツ公使などを務めた政界、官界の大物（後に首相となる）であり、公爵。三男は中院通規伯爵である。

実は西園寺公望と、貞剛の親友である品川弥二郎とは憲法制定などで伊藤博文を通じて交流があった。

各所から公望の甥に学習院の学生がいるとの情報が貞剛の下に集まったが、その情報源の一人は品川だったのである。

貞剛は、亡くなった友忠も学習院で学んでいたことから、これは何かの縁だと思い、早速、友忠の学習院時代の友人に依頼し、隆麿を確認することにした。

友人は、隆麿を学習院の構内の庭に誘い出し、桜の木の下で談笑していた。その傍を貞剛はさりげなく通りすぎたのである。

「この人しかない」

貞剛は、すずやかな印象の隆麿を一目で気に入った。その後、学習院での評判、成績などを調査したが、ますます隆麿を気に入り、

ぜひ満壽の婿として迎え入れたいと考えた。

貞剛は、山王日枝神社ひえ近くの料亭に徳大寺實則、西園寺公望、中院通規、そして隆磨を招き、「ぜひ隆磨殿に、住友家へ入っていただきたい」と平伏したのである。

貞剛は、住友入りを躊躇ちゆうちゆうする隆磨に、「住友の財産といったところで何ほどのものでもなく、たかが銅を吹いて儲けたくらいのもので、潰ゆえしてもらっても結構です」と言い切った。

これには隆磨は当然のこと、實則や公望、通規の三人も驚き、かつ爽快な気持ちになった。

特に公望は声に出して笑い、「隆磨、実業界で自由に活躍するのも愉快ではないか」と住友入りを勧めた。

隆磨は、開明的な思想の持ち主である公望を深く尊敬していたため、その場で住友入りを応諾した。

——居合いあいと同じだ。

貞剛は、安堵あんどした。

若い頃、居合してんの四天流免許皆伝めんきよかいでんとなったが、それと同じだ。

たとえ剣は抜かなくても、覚悟を定めた迷いのない説得が功を奏したのだ。

貞剛は、峯山に説得にあたっての心構えを聞いていた。

峯山は「仏魔とは是れ染浄の二境なり」と言った。臨済の教えな

のだろう。

迷いがあれば魔となり、迷いがなければ仏となるという意味だと

貞剛は思った。

「剣禅一如と同じ心境で臨むということですね」
けんぜんいちごよ

貞剛は応じた。

「剣と禅とは相通じる。剣に迷いがあつては人が斬れぬ。それどころか自分を生かすこともできぬ。迷いを捨て、臨むことだ。そうすれば道が開けるだろう」

峩山は微笑んだ。
ほほえ

貞剛は、峩山の示唆しきのお陰で、「住友を潰してもよい」との覚悟を込めた言葉を発した。この一太刀ひとたちが、隆磨の住友入りを迷う心を斬ったのだ。

隆磨は、明治二十五年（一八九二年）四月十八日、満壽と結婚し、翌年四月に家督を相続し、十五代家長友純ともいととなったのである。

4

「誰もこの危急存亡とせきの秋に身を捨てて住友を守ろう、祖業である別子銅山を守ろうという気概のある者はいないのか」

居並ぶ重役たちを前に、幸平は顔を真っ赤にして声を荒らげてい

た。

眉は吊り上がり、目は赤く充血し、口ひげは怒りを映しプルプルと震えている。

重役たちは、嵐が過ぎ去るのをじっと待つかのように顔を伏せて、まともに幸平の顔を見ようとしていない。その中で一人貞剛だけが幸平を見つめていた。

「私は、別子銅山がたった千円で売られようとしていた時、命を捨てる覚悟で重役たちに反対し、新政府の大物たちを説得して回った」幸平は往時を振り返った。「そのお陰で今の住友があるんだ。そのお陰でお前たち無能の役員たちも毎日、飯を食い、酒が飲めるのではないのか。お前たちは、住友の繁栄のために、高禄を食^はんでいるだろう」

貞剛は、幸平の怒声を聞き、悲しい気持ちになっていった。

住友は、十五代友純を家長に迎えて、新たに出発したが、問題は山積みとなり、危機は深まるばかりだった。

別子銅山が開坑して二百年経ったが、積年の問題が一気に噴き出し始めたのである。

精錬所から出る亜硫酸ガスが周辺の農地の米や野菜を枯らし、農民たちが抗議行動を起こしている。それに呼応するかのよう^に別子

銅山では職員や坑夫たちも本店の指示に逆らい、このままでは銅山の操業が止まってしまいかねない事態になっていた。

誰かが別子銅山に赴き、事態を早急に収拾する必要に迫られていたのだ。

——これらの問題は、宰平叔父の専横に起因するとの声が大きいつ頃からこれほどまでに宰平叔父は独裁者ようになってしまったのか。

最初は、宰平と精錬所技術者、しおのものすけ塩野門之助との対立から始まったのだろう。

塩野は、別子銅山近代化のために呼んだフランス人技師ルイ・ラロックの通訳として宰平の目に留まった。

宰平は、お雇い外国人を排して日本人の手で別子銅山の近代化を進めようと、塩野と社員の増田芳造よしぞうをフランスへ留学させた。

彼らは明治九年（一八七六年）四月五日に横浜を出港した。

——他日業を得るの後帰朝、かの大恩の万分の一を報ぜん。

二人は宰平に大いに感謝してフランスに渡った。しかし増田は神経症になり七月三十日に帰国する。

一方、塩野は、名門サン・テチエンヌ鉱山学校で学び、明治十四年（一八八一年）十二月に帰国する。五年八カ月に及ぶ留学費用は約五千円から六千円も要したという。現在の価値に正確には換算す

ることはできないが、二億円以上にも及ぶだろう。

塩野は帰国後、住友に戻り、新居浜港に面した惣開そうびらきに洋式の銅精錬所を造るべく日夜努力していた。

塩野は、大型の中央精錬所を造る発想を持っていた。

別子銅山もやがて銅の産出が尽きる。その時は港を利用して国内外から銅鉱石を輸入し、精錬するのだ。

塩野は幸平に「いずれ別子も鉱脈が尽きることもあります。その際には国内外から銅鉱石を輸入し、精錬する中央精錬所を造りたい」と提言した。

幸平は、この言葉に烈火れつかのごとく怒った。「こいつは何を言うか」という思いだったのだろう。

明治十五年に幸平は家法を定め、そこに別子銅山を「万世不朽の財本」、すなわち住友家の永遠の利益の源泉であると位置づけた。

幸平は、幕末に住友家が困窮した際、別子銅山を売却してしまおうとした重役たちがいたという事実が、ある種のトラウマ（心的外傷）になっていたのである。

——二度とあのような事態を起こさせない。別子銅山は永遠である。

ところが塩野がそれを否定するようなことを言ったのだから、怒るのも当然だった。

「バカ者！ それが莫大な金ばくだいをかけて留学をさせてもらった住友に対する報あだい方か！ お前は恩を仇で返すのか」

幸平は塩野と冷静な意見を交わそうとしない。

塩野と対立した幸平は、明治十九年（一八八六年）に東京大学理学部の岩佐巖教授いわさいわおの招聘しょうへいを決める。

「欧州では製鉄業や化学工業が盛んだ。別子銅山で廃棄していた銅分が少ない鉍石いおうなどから鉄や硫黄を取り出すんだ。こうすれば別子銅山は永遠に栄える」

幸平は、あろうことか中央精錬所案を退けていながら、岩佐の招聘を塩野に命じたのである。

塩野は、力を落として貞剛の前に姿を現した。

貞剛は塩野の様子が尋常でないことに気づき、「どうしたのだ」と声をかけた。

「多額の費用をかけて留学させてもらい、住友の助けになろうと思いましたが、どうにもこうにも幸平殿が頑迷で、これでは何もできません」塩野は、弱り切った表情で、せつせつと中央精錬所の建設の必要性を訴えた。「確かに幸平殿の言われるように、別子の銅鉍石は含銅硫化鉄鉍で鉄分や硫黄を多く含んでいます。これを利用して製鉄や硫酸製造するには多額の費用が掛かり、採算に合うとは思われません。なんとか思いとどまるように言ってくださいません

か」

貞剛は、塩野に「時を待て」とだけ言った。

幸平が一旦思い込んだら、後に引かないことを十分に承知していたからだ。

塩野はしぶしぶ納得し、岩佐招聘に力を注いだ。

岩佐は住友に入社するや、廃棄された銅から副産物を取り出すには、別子銅山に近くて、水利などに便利な山根に銅精錬所、製鉄所を造るべきだと幸平に提言する。

こうして最終的には総額約八万円もの巨費を投じて山根精錬所が造られる。現在の貨幣価値から言えば、二十億円以上になるだろうか。一方、惣開の精錬所建設も進められるが、塩野は、幸平に何度もコスト高になることを訴え、山根精錬所と惣開精錬所を統合し、中央精錬所を造るべきだと訴える。しかし幸平は岩佐の方針を選択し、塩野の意見は全く聞き入れられなかった。やむなく塩野は、明治二十年（一八八七年）に住友を退職するに至った。

「どうしても辞めるのか」

貞剛は、塩野を引き留めにかかった。

「はい、私は大恩ある住友に貢献したいのは山々なのですが、幸平殿の頑迷さが変わらねば、私の居場所はありません」

「必ず君を必要とする時が来る。その時は必ず戻ってきてくれたま

え」

貞剛は、塩野ほどの人材を上手く活用できない住友には大きな問題があると思った。しかし、それをすぐに改善できない自分も悔しい限りだ。「時を待て」というのは、塩野に対するよりも自分に対する戒めでもあった。幸平は、塩野の退職に関しては一言も口にしなかつた。恩知らずと思つたか、それとも……製鉄業成功という夢に、気持ちを高揚させていたため、塩野の退職など、気に留めなかつたのだろうか。

幸平は、まだ大声で怒鳴^{どな}っている。

—— 幸平叔父は、元龜天正以来の英雄であることには間違いない。しかし織田信長は本能寺の変で明智光秀^{あけちみつひで}に討たれ、豊臣秀吉は朝鮮出兵に失敗し、豊臣家は滅亡してしまつた。人には、それぞれ器量というものがある。幕末、明治初年の乱世には幸平叔父のような英雄が必要だが、安定した時代を築くには徳川家康のような人物が必要なのではあるまいか。

—— 私が徳川家康なのか。あるいはそのような器量があるのか。貞剛は自問し、「ない」と否定する。

—— 私にあるのは何か。私は、今まで何かを成し遂げたということはない。幸平叔父のように他人に誇るものはない。しかし、未熟

であることを知っている……。自分の器量というものをわきまえて
いる……。それくらいのものだ。

貞剛は、ふっと寂しく笑みをこぼした。

山根、惣開の二つの精錬所は明治二十一年（一八八八年）に同時
に操業を開始した。

明治二十三年（一八九〇年）には山根精錬所には製鉄係が設置さ
れ、明治二十六年（一八九三年）には惣開精錬所に製鉄所が開設さ
れる。

幸平は、ますます製鉄業に身を入れ始めた。

——山根、惣開の精錬所が稼働し、銅は増産となったが、周辺農
地に煙害がひどくなり始めた。精錬所を造る際に煙害対策をもっと
講じるべきだったのではないか。

貞剛は深く思い悩んだ。目の前に赤茶け、はげ山となった別子の
山々が浮かんだ。

二か所の精錬所の稼働で別子の産銅量は順調に伸びた。貞剛が住
友に入社し、本店支配人となった明治十三年（一八八〇年）は約一
〇〇〇トンだったが、煙害が目立ち始めた明治二十三年には約二〇
〇〇トンとなり、二倍にもなったのである。

この増産には鉱山鉄道の開通が貢献した。

幸平は明治二十二年（一八八九年）五月、還暦記念に妻の幸を伴って欧米の旅に出た。

その際、ロッキー山脈のコロラドセントラル鉱山鉄道に乗り、非常に感激したという。

「鉄道の左右、岩盤のいたるところに坑口がひらいており、その厳しい状況は日本の鉱山となんら変わることはない」と鉄道敷設に自信を持った。

明治二十四年（一八九一年）に、まず下部鉄道（惣開―端出場間一〇・四六一キロ）、続いて上部鉄道（角石原―石ヶ山丈間五・五キロ）の工事に着手し、明治二十六年（一八九三年）に開通した。

この鉱山鉄道により別子銅山で採掘された銅鉱石は角石原で貨車に積み込まれ、上部鉄道の一本松駅を経由し、石ヶ山丈で一旦、下ろされる。その後、鉱石は索道（ロープウェイ）によって端出場に運ばれ、下部鉄道によって新居浜に運ばれる。

鉄道が開通するまでは人や牛によっていた運搬が汽車に代わったことで大幅に効率化し、銅の増産に圧倒的に寄与した。

鉱山鉄道は必要な設備だったが、こうした巨額投資は別子銅山の経営を大きく圧迫したのである。

明治二十五年（一八九三年）は鉄道建設費に約十九万円、製鉄所に約一万四千元など約二十一万円を費やした。その結果、八六四〇

円もの赤字を計上してしまった。これは西南戦争後のインフレーションを抑えようとした松方正義蔵相が実施した松方デフレで、世の中が急激に景気悪化した明治十七年（一八八四年）以来の赤字となった。

—— 宰平殿は、重任会で重役たちの意見に全く耳を傾けない。そればかりかせつかく家長友純様をお迎えしながら、その存在さえ無視しているのは許されない。赤字の責任をどう考えているのだ。

赤字という事態に宰平に対する批判の声が、さらに大きく聞こえるようになった。

—— 伊庭は何をしているのだ。甥であり、支配人なのだからもつと意見を言うべきだ。

貞剛に対する批判も大きくなりつつあった。

—— 悪い時には悪いことが重なるものだ。やることなすことが悪い方に転がっていく。これが良き勢いなら良い方に転じていくが、悪い勢いなら、どうしようもなく事態を悪化させる……。

—— あれは何が何でも止めるべきだった……。

貞剛は、残念に思うとともに自分の力の無さを痛感した。

貞剛が反省するのは、別子銅山で起きた「金矢事件」から発展した一連の問題に対する対処だった。

宰平の製鉄業に対する思い入れは強く、それに呼応するように別

子銅山技師、金矢が製鉄業の拡大、拡充を進言した。

それを受けて宰平は金矢を製鋳課長などに抜擢したが、成果が上
がらず、怒った宰平は別子銅山支配人・広瀬坦、山根精錬所監督・
大島供清をともしよ厳罰に処し、金矢を解雇したのである。明治十九年（一
八八六年）のことだ。この時、金矢たち現場の者にだけ責任を取ら
せ、宰平自身は自らを全く責任の埒外わちがいに置いたことに強い非難の声
が起きた。果たしてそれは宰平の耳に届いたのだが、宰平は「雇員
が何を騒いでいるのだ」と問題視しなかったのである。

宰平の銅山人事への不満が鬱積うっせきし、銅山職員、労働者の士気に影
響が開始した。

そこで宰平は、明治二十五年二月、ついに銅山支配人広瀬を解任
し、久保盛明を後任に充てた。久保は宰平の甥だった。そのため血
縁重視の人事であるとして、銅山の現場の不满に一気に火を点けた
のである。自ら責任を取らずして、縁故人事をするのか、というわ
げだ。

貞剛は、宰平に人事は公平にするべきであることや、宰平自らの
責任もなんらかの形で明らかにした方がいと諫言かんげんしたが、宰平は
聞く耳を持たなかった。

それどころか久保の銅山支配人赴任にあたって自らも別子に行き、
社員、鋳山労働者にむかって演説し、宰平の指示に従えない者は解

雇するとの「盟約書」を求めたのである。

盟約書の内容を要約すれば、世間の雑音、風潮などに惑わされることなく、貴賤尊卑きせんそんびの立場をわきまえて仕事に専念しろ、というものだった。もしこれに反すれば「住友家雇人の資格を除かれ」ても異議申し立てはするなどの罰則がついていた。

ありていに言えば、宰平や新任の銅山支配人である久保への絶対服従を無理強いしたのである。

——宰平のことを、これまで雇員はみな尊敬、畏敬していた。それは雇員らの心からの思いだった。住友が今日あるのも、自分たちがこうして働けるのも宰平のお陰だと思っていた。ところが盟約書をとるでもしないと雇員をまとめきれないということは、宰平が雇員を信ぜず、雇員は宰平を信じないという最悪の事態ではないか。総理人と雇員とが信じあわないで、住友家が維持、発展できるはずがない。どうしてそれが宰平には分らないのだ……。

別子銅山の現場で、宰平や久保支配人に対する不満はますます大きくなった。

特に住友家元理事でもある大島供清は激烈である。宰平と久保に対する反対派をまとめあげ、銅山内部での対立を扇動していた。

もともと大島は宰平に認められて昇進してきたのであるが、金矢事件での厳罰を境に、宰平に不満を抱くようになった。

またその三年前の明治二十二年（一八八九年）に幸平が妻・幸を伴って欧米旅行に旅立つ際、同行を強く要望したにもかかわらず拒否され、強引に船に乗り込むなどの行為に及び、さらに幸平の逆鱗げきりんに触れ、山根、惣開両所長ならびに理事を解任されてしまった。それ以来、深く幸平を恨むようになった。

大島は、幸平を尊敬していた。しかしその寵愛ちゆうあいが自分に向いている間は良かったが、縁故者である久保や他の優秀な雇員に向き始めたことに嫉妬しつとの念を抱いたのだろう。さらに度重なる厳罰を受けたことで、もはや幸平から愛されていないとの思いを強くし、恨みに転じたものと想像される。

別子銅山が大島たちの動きで幸平派と反幸平派に分かれて対立し、その動きは大阪本店の重任局、すなわち重役たちにも影響を与えるようになった。

本店支配人であり、かつ、久保と同じく幸平の甥である貞剛にとっても看過できない事態となった。

それに加えて遂ついに明治二十六年九月、煙害に苦しむ農民たちの暴動が起きたのである。

金子かねこ、新居浜、庄内、新須賀四村しんすかの農民総代は煙害被害を愛媛県に訴え出た。数年前から農民の間でくすぶっていた煙害問題が社会問題として遂に表面化したのだ。

新居浜村役場も住友新居浜分店に煙害調査を要請する。ところが住友は、「煙害ではない。虫害である」として取り合わなかった。この住友の態度は不誠実であるとして、農民たちの反感を高めることとなる。

同年九月二十五日、新居浜村農民約六十名が「溶鉱所の事業を停止すべし」と住友新居浜分店に押し寄せた。

翌二十六日には、新須賀、庄内、金子村農民が、さらに翌二十七日には新居浜、金子村農民が同様の要求を掲げて住友新居浜分店に押し寄せたが、住友は煙害ではないと言い張って、一切交渉に応じなかった。

怒りが収まらない農民たちは翌二十八日、新居浜、金子村の数百名で住友新居浜分店に押し寄せ、「支配人を出せ」「溶鉱所の事業を止めろ」と騒ぎ、警察が出動する事態となった。

これだけの騒ぎになっても、住友は煙害を認めず虫害であるとして農民を説得しようとした。それが再び農民の怒りに火を点け、同年十月八日、新居浜村などの農民数百名が住友新居浜分店に押し寄せ、警官とぶつかり、けが人が出てしまった。

このような状況を受け、県知事が農民と住友との交渉仲介に入ったが、住友は煙害を認めないため、事態は一層、深刻化し、もっと大きな暴動が起きる懸念があった。

「小作人が騒ごうが、そんなものは問題ではない。騒いでいる連中の農地を買えば良い。金で解決しろ」

宰平が重役に怒鳴っている。

住友は、別子銅山で消費する飯米確保のため、新居浜村などに畑のみで約六百町歩（東京ドーム約百二十八個分）という広大な土地を所有する大地主だった。煙害で騒ぐ農民たちの多くは、住友の土地を借りて別子銅山の飯米を作る小作農民たちだった。このことも住友が容易に煙害を認めない一因になっていたと思われる。小作人に対する蔑視的な思いが、久保支配人や宰平たちに根強くあったのだろう。

——農民たちの怒りは尤もだ。最近の米、麦の生産量は激減していると聞く。またそのことが住友以外の地主に対しての小作料減免要求になっているようだ。このままでは銅山の飯米確保にも問題が出るだろう。

貞剛は、宰平の怒声を聞きながら、農民たちの窮乏に心を痛めていた。

実際、金子村は明治二十年（一八八七年）には米二五〇〇石、麦二一〇〇石だったものが、煙害が社会問題化した明治二十六年には米一一八〇石、麦八八九石と急減していた。

この農民たちの騒ぎに便乗する形で、大島たち反宰平派の動きもさらに激しさを増してきていた。煙害、農民暴動、そして別子銅山内部の抗争と三つの問題が同時に発生し、今や住友は八方塞がりはっほうふさの袋小路に押し込められていた。なんとか突破口を見つけねば、住友は破綻はたんする……。

「小作人の暴動や大島などという雇員に過ぎない者を抑えることもできないのか。お前たちは、役立たずだ！」

ひと際高く、宰平の怒声が重役たちの間に響き渡った。

その時、貞剛は静かに立ち上がった。そして宰平を見つめた。

「貞剛、何か意見があるのか」

宰平が聞いた。

「私が別子に行きましょう」

貞剛は静かに言った。

宰平の表情に戸惑いの色が浮かんた。

貞剛は、本店支配人として宰平に次ぐナンバー2の地位にある。

その貞剛が別子銅山に乗り込むと言う。それほどの地位の者が、その地位に相応しくない現場の交渉役として別子銅山に行くと申し出ることを期待していなかったのだ。

「なんだと？ お前が行くというのか」

「はい、私に何ができるか分かりませんが、行かねばならないでし

よう」

貞剛はあくまで冷静に言葉を選ぶ。全く気負いはない。

重役たちの間を沈黙が支配した。意外な事態に誰もが幸平の反応を気にしている。ただならぬ緊張感が張り詰めている。

「さすが、我が甥。貞剛、よくぞ志願してくれた。礼を言うぞ」幸平は破顔し、「貞剛こそ、住友を真に憂^{うれ}うる人物だ」と手を叩いて喜びを溢れさせた。

他の重役たちも、やっと幸平の怒りから逃れられると安堵したかのように、貞剛に拍手を送った。

貞剛は、幸平そして重役たちに静かに頭を下げた。

〈つづく〉